

かっぱおやじは幼児の家庭生活にどのように拡がったか？ —幼稚園から家庭へのローカルな空想上の存在の展開—

富田 昌平*・久世 彩加**

How did Kappa-Oyaji spread into the family life of young children?
Expansion of local fantasy beings from kindergarten to home

Shohei Tomita and Ayaka Kuze

要 旨

本研究では、幼児は幼稚園で生成・共有されたローカルな空想上の存在（かっぱおやじ）についてどのように認識しているのか、また、その存在は幼稚園から家庭生活へとどのような拡がりを見せたのかを探った。かっぱおやじをめぐる想像的探検遊びに参加した年長児（5-6 歳児）36 名の保護者を対象に、家庭でのかっぱおやじについての会話や遊び・活動、かっぱおやじに対する信念、他の空想上の存在に対する信念との関連を尋ねる質問紙調査を行った。調査の結果、幼児の多くはかっぱおやじの神秘的で驚異的な属性に関心や疑問を持ち、家庭でもそれらを持続させ、関連する絵本や遊びを楽しんだり、身近な場所でそれを探し求めたりするなど、その存在のリアリティは幼稚園の枠内に留まらず、家庭生活へと拡がっていた。また、幼児の多くはかっぱおやじの存在を信じており、経験したことを興奮した様子で語ったり、日常の何気ない無関連なものをかっぱおやじと関連付けて怖がったりしていた。さらに、かっぱおやじの存在を信じることは、他の空想上の存在を信じることや、家庭内での会話で話題にしたり、遊び・活動につなげたりすることと関連がないことが示された。

キーワード：ローカルな空想上の存在、リアリティ、空想、想像的探検遊び、幼児

問題と目的

一般的には起こり得ないことであるが、幼稚園や保育園では、鬼や忍者、お化け、山姥、河童、魔女などがしばしば出現する（富田, 2018）。子どもたちは直接その姿を目にしたり、その声を耳にしたりすることもある。間接的に手紙が届けられたり、秘密の地図や暗号、贈り物などを手に入れたり、足跡や手形、あるいは、その存在が関与したと考えられる不可解な環境の変化を目の当たりにする。子どもたちはそうした経験を通して、その存在が確かに自分たちの身近な場所に存在していることを感じ取るようになる。

もちろん、先に挙げた存在の数々はいずれも現実には存在しない空想上の（あるいは伝説上の）存在である。ゆえに、子どもたちが目にしたのは大人がよく似せて扮装したものであったり、単なる見間違いや思い違いの類であったり、声も別の誰かがそれらしく似

せて見えない場所から聞かせたものであったりする。また、手紙も園の先生がそれらしく用意したものであったり、場合によってはすっかりその気になった子ども 1 人が自分の手で作り出したものであったりする。秘密の地図や暗号、贈り物にしても同様であるし、足跡や手形、不可解な環境の変化も、大人による仕掛けの場合もあれば、子どもによる独自の意味付けや思い違いの場合もあったりする。

このように幼稚園や保育園では、周りの大人たちの仕掛けや働きかけに、子どもたちによる見間違いや思い違い、独自の意味付け等が加わって、絵本や物語の世界にしか存在しないと思われていた空想上の存在に生命が吹き込まれ、それらが子どもたちの前に確かな存在感を持って立ち現れるという実践がしばしば行われている。この種の遊びは「想像的探検遊び」（藤野, 2008）と呼ばれ、「保育者が子どもに内緒で空想的存在の実現可能性を示唆するような仕掛けを用意し、探検

* 三重大大学教育学部

** 松阪市立保育園

に対する興味や推論の楽しさを喚起しながら、保育者自身も子どもと同じ立場でその過程を共有していくという形態をとる遊び」と定義されている。

この想像的探険遊びが保育関係者の間で注目され、その後、全国の幼稚園や保育園で広く行われるようになるきっかけをつくったのは、岩附・河崎（1987）による著書『エルマーになった子どもたち』であった。この著書において、岩附は保育園の5歳児クラスの子どもたちが、保育者による児童書『エルマーのぼうけん』（ガネット作）の読み聞かせとその後の示唆的な働きかけや仕掛けによって、遠足先の森や林のどこかに本物のりゅうが潜んでいるのではないかと信じ始め、本気の探検に出かけていく姿を生き生きと描いている。このエルマー実践は、遊び研究者の河崎（1993, 1994, 1997）や加用（1990, 1993, 1994）によって広く取り上げられ、数多くの同様の実践の紹介とともに、その意義や面白さが深く追究されていった。その結果、1980年代半ばの発表から現在に至るまでの約30年間で、保育関係の雑誌や著書に掲載された想像的探険遊びの実践報告の数も100を超え、現在では、数ある保育方法の1つとして保育・幼児教育の現場にしっかりと根を下ろし、定着するに至っている（富田, 2018）。

しかし一方で、こうした実践数の増加に対して、それに関する実証的研究は必ずしも十分とは言えない。これまで発達心理学の分野では、想像的探険遊びと関連する実証的研究として、空想的な存在やプロセスについての信念を扱った魔術的信念（magical belief）に関する研究や、現実の不確かな問題に対して物理的法則に違反する魔術原理によって理解し解釈しようとする魔術的思考（magical thinking）に関する研究が行われてきた（e.g., Harris, 2000; Rosengren, Johnson, & Harris, 2000; Subbotsky, 2010; Woolley, 1997）。特に空想上の存在に対する信念が取り上げられる場合には、サンタクロース、歯の妖精、イースターバニーといった行事関連の空想上の存在（e.g., Clark, 1995; Goldstein & Woolley, 2016; Shtulman & Yoo, 2015）や、怪物、魔女、妖精といった伝説・童話関連の空想上の存在（e.g., Harris, Pasquini, Duke, Asscher, & Pons, 2006; Sharon & Woolley, 2004; Woolley & Cox, 2007）、あるいは、ミッキーマウス、バットマン、ハリーポッターといったテレビ・映画・漫画など現代メディア関連の空想上の存在（e.g., Corriveau, Kim, Schwalen, & Harris, 2009; Li, Boguszewski, & Lillard, 2015; Skolnick & Bloom, 2006）が主な対象とされてきた。想像的探険遊びで取り上げられる鬼や忍者、お化け、山姥、河童、魔女などは、このうち、伝説・童話関連の空想上の存在に位置づけられるが、それらが幼稚園や保育園というローカルな場で子どもたちによって生成・共有されるというプロセスを経た場合、

それらは本来の伝説・童話関連の空想上の存在という位置づけから離れ、子どもの生活と遊びの場で生成・共有されたローカルな空想上の存在として新たに位置づけることができる。こうしたローカルな空想上の存在は、実証的研究の対象とされることはなかった（後述する Boerger, Tullos, & Woolley, 2009; Woolley, Boerger, & Markman, 2004 は例外）。

エルマー実践から30年以上が経ち、想像的探険遊びも保育・幼児教育の現場において広く定着している現状を考えると、この遊びを通して出会うローカルな空想上の存在について子どもたちがどのように認識し、幼稚園・保育園で味わったその遊びの楽しさ・面白さを、日々の家庭生活に持ち帰ってどのように味わっているのかに関して、逸話的ではなく実証的に把握しておくことは重要なことと思われる。

そこで本研究では、幼稚園での想像的探険遊びで生成し共有されたローカルな空想上の存在に対する子どもの認識と、その存在の幼稚園から家庭生活への拡がりについて探ることを目的とする。具体的には、ある幼稚園で4歳児クラス後半から5歳児クラスにかけて展開された「かっぱおやじ」の実践に焦点を当てる（この実践の詳細については、富田・久世・河内（2021）を参照のこと）。実際に子どもたちがその想像的探険遊びに参加し、かっぱおやじというローカルな空想上の存在を生成し共有している渦中であって、子どもたちは家庭生活の中でそのことを親にどのように語り、どのような遊びや活動へとつなげているのか、また、そもそもそのローカルな空想上の存在のことをどの程度信じているのか、それらを信じることとその他のより一般的な空想上の存在を信じることとの間には関連が見られるのかどうかについて、保護者を対象とした質問紙調査によって検討する。

方 法

対象児

三重県内の幼稚園の年長クラス（5-6歳児）の在園児52名（男児23名、女児29名）の保護者のうち、質問紙に回答した36名（男児16名、女児20名）を対象とした。対象となった幼児は、年中クラスの11月から翌3月までを中心にクラス内で生成され共有されたローカルな空想上の存在「かっぱおやじ」の実践（富田ら, 2021）に参加した幼児であった。質問紙の回収率は69.2%であった。

手続き

質問紙調査は、事前に園長、副園長、担任教諭に調査内容を説明し、許可を得た上で実施した。質問紙はクラス担任を通じて幼児の保護者に配布し、約1週間後

に回収した。

質問紙の主題である「かっぱおやじ」の実践は、2016年11月から12月までの出現期から、2017年1月から3月までの拡大期、及び、年度が代わりクラス編成も変わった4月から7月までの潜伏期を経て、9月から11月までの復活期までの1年間にわたる子どもの姿が記録されている(富田ら, 2021)。このうち、本調査は潜伏期の終わりにあたる2017年7月に行われた。かっぱおやじのイメージが子どもたちの中で最も躍動した拡大期からすでに4か月が過ぎていることから、保護者の記憶があいまいであることも予想されるが、幼稚園での拡大期から潜伏期において、家庭生活の中ではかっぱおやじのイメージがどのように躍動していたのか(あるいはしていなかったのか)を探る意味でも、あえてこの時期に実施した。

質問紙では、子どもの性別、月齢、きょうだい数と出生順位について尋ねた後、かっぱおやじに関する次のような説明文を掲載した(クラス名はいずれも仮名)。

2016年11月、すみれ組で「かっぱおやじ」のことが話題になりました。「かっぱおやじ」とは、絵本『でた！かっぱおやじ』(安曇幸子・吉田裕子・伊野緑 著)に登場する架空の存在であり、うさぎ組で話題になる前に、すでに当時の5歳児クラスで話題になっていました。うさぎ組での保育の中で、ふと不確かだと思えるような出来事に会った時、子どもの口から「もしかして、かっぱおやじじゃない？」というつぶやきが漏れ、その後、こあら組へも広がっていききました。それ以降、何か不思議なことやよくないことが起こると、子どもたちは「かっぱおやじのしわざじゃない？」と言うようになり、「かっぱおやじ」は子どもたちにとってとても身近な存在になっていききました。

2017年3月には、うさぎ組とこあら組の合同の園外保育で偕楽公園に出かけました。その時、みんなで「かっぱのめがみさま」からの手紙と金のひょうたんを見つけました。このとき、「かっぱおやじ」を怖がっている子どもの姿、「かっぱのめがみさま」からの手紙と金のひょうたんに喜ぶ子どもの姿、「かっぱおやじ」は本当にいたんだ！と嬉しそうな子どもの姿など、様々な子どもの姿がありました。

以上の説明を踏まえた上で、かっぱおやじに関する質問を行った。質問1:「かっぱおやじ」について、ご家庭内でお子さんと何かお話をされたことはありますか(ある／ない)。「ある」場合には、どのようなお話をされたか、できるだけ詳しく教えてください。質問2:「かっぱおやじ」について、ご家庭内でお子さんと何か関連する遊びや活動をされたことはありますか(ある／ない)。「ある」場合には、どのような遊びや活動を

されたか、できるだけ詳しく教えてください。質問3: お子さんは「かっぱおやじ」の存在を信じている様子ですか(「すごく信じている」から「全く信じていない」までの5段階評定)。質問4: 質問3での回答について、どうしてそのように思われましたか。根拠となるお子さんの発言や行動などがありましたら教えてください。

また、かっぱおやじに対する子どもの信念との関連を探るために、子どもに馴染みのあるいくつかの空想上の存在に関する質問を行った。質問5: 次の空想上の存在のうち、お子さんが現在「信じている」と思われるものはありますか。該当するものに○をしてください(サンタクロース、節分の鬼、妖精、魔女、プリキュア、仮面ライダー)。質問6: 次の空想上の存在のうち、あなた自身がお子さんに「信じていてほしい」と思われるものはありますか。該当するものに○をしてください(サンタクロース、節分の鬼、妖精、魔女、プリキュア、仮面ライダー)。

なお、6種類の空想上の存在のうち、サンタクロースと節分の鬼は年中行事と関連して馴染みのある空想上の存在であり、妖精と魔女は伝説や童話等を通して馴染みのある空想上の存在、プリキュアと仮面ライダーはテレビや子ども雑誌など現代メディアを通して馴染みのある空想上の存在であった。また、統計処理にはjs-STAR version 9.7.8jを使用した。

結 果

かっぱおやじについての会話と遊び・活動

幼稚園でかっぱおやじを生成し共有する経験をした後、子どもは家庭の中で親とそれについてどのように会話し、どのような遊びや活動へとつなげていったのであろうか。家庭内での会話(質問1)や遊び・活動(質問2)の有無について尋ねたところ、会話に関しては32名(89%)、遊び・活動に関しては10名(28%)の親が「ある」と回答した。遊び・活動に関して「ある」と回答した者は、全て会話に関しても「ある」と回答していた。このことから、大部分の子どもが幼稚園から帰った後に、家庭での親との会話の中でかっぱおやじを話題にしていたことが分かった。

具体的な会話内容に関する何らかの記述は、31名の親から得られた。これらの記述は2つの視点から分析された。第1に、会話内容の範囲が幼稚園内(園外保育も含む)に留まっているか幼稚園外へと広がっているかという視点であり、第2に、かっぱおやじについて何をどのように話題にしていたかという視点である。

まず、第1の視点について分析するために、得られた記述を「幼稚園の枠内」、すなわち、幼稚園で経験した出来事の報告のみの記述と、「幼稚園の枠外」、すな

わち、幼稚園で経験した出来事の報告だけでなく、幼稚園以外の家庭やその他の場所で経験した出来事や子どもが想像したり推理したりした事柄も含む記述とに分類した。その結果、Table 1 に示すように、「幼稚園の枠内」の記述は 10 名 (31%) で確認され、「幼稚園の枠外」の記述は 21 名 (66%) で確認された。

具体的には、幼稚園の枠内に関しては、「幼稚園の壁にヒビが入っていて、子どもが『これはかっぱおやじのしわざかもしれない』と言っていました」「『K 公園にかっぱおやじがいるよ』『探しに行ったよ』と言っていました」「偕楽公園で手紙とひょうたんを見つけたお話をしてくれました」「こんな事があったよ!! という軽い報告を受けましたが、まだ伝える力が弱かったので私にはイマイチ分からない話でした」などであり、幼稚園の枠外に関しては、「川沿いを通った時には、『ここにかっぱおやじがいるかも!』と探していました」「何かあると『かっぱおやじかも!』とか、夜寝る時に物音がすると『かっぱおやじかも!』と話していました」「トイレの手洗いの吐水口から水が出て、ロータンのフタの穴に水が流れ込む。その穴から『かっぱおやじがのぞいているみたい、怖い』と」「子どもが自分で『かっぱおやじからの手紙』を書いて、絵本の間に挟んでいた。『かっぱおやじが家にも来たのかな?』と遊んで喜んでいて」などであった。このことから、幼稚園で生成し共有されたローカルな空想上の存在のリアリティは、多くの子どもにおいて、幼稚園の枠内に留まらず、幼稚園の枠を超えて家庭やその他の場所での経験や想像・推理等へと広がっていたことが示された。

次に、第 2 の視点について分析するために、先述の

Table 1 かっぱおやじについての会話と遊び・活動の内容

		人数 (%)
会話 (N=32)	幼稚園の枠内	10 (31)
	幼稚園の枠外	21 (66)
	無回答	1 (3)
会話：枠外 (N=21)	出没する場所	8 (38)
	姿かたち	3 (14)
	性格・好み	3 (14)
	疑問	3 (14)
	肯定的感情	4 (19)
	否定的感情	4 (19)
	その他	6 (29)
遊び・活動 (N=10)	絵本を読む	3 (30)
	周辺を探索	4 (40)
	関連する遊び	2 (20)
	その他	2 (20)

注. %は分析ごとの全体数を母数としている。

21 名による幼稚園外の出来事の経験や想像・推理等に関する記述の中から、次の 7 つのカテゴリーをкаっぱおやじに関する主要な話題として抽出した。(1) 出没する場所…かっぱおやじが出没した、あるいは出没しそうな場所を話題としたもの (例:「かっぱおやじは水道らへんに隠れている」「家の中にはいないけど、外にはいる」「物音や影を『かっぱおやじかもしれない!』とよく言っていました。トイレや 2 階の部屋はよく出るようです (笑)」。)(2) 姿かたち…かっぱおやじの姿かたちを話題としたもの (例:「姿は黒い」「うさぎ組でかっぱおやじの話題が出た日、家に帰る途中、『かっぱおやじを見た!』と言いました。確か髪型、服装もしっかり目撃したらしく、『担任の先生に早く知らせて!』『電話してすぐ伝える!』と言い、幼稚園に電話をかけて報告していました。)(3) 性格・好み…かっぱおやじの性格や好みを話題としたもの (例:「『かっぱおやじは、悪さをするかっぱおやねん』と言っていました」「『かっぱおやじは水を好み、(水道の) 管内を自由に移動できるから』と力説していた。)(4) 疑問…かっぱおやじについて子どもなりに疑問に思ったことを話題としたもの (例:「かっぱおやじは何の食べ物が好きかな? どこに住んでるのかな?」「かっぱおやじは普通のかっぱより強く、幼稚園に入ってきて来ないように、『ダメ』と (書いた) 貼り絵をしたりした、という話を聞きました。しかし、『かっぱおやじは文字が読めるかなあ』という疑問が生まれたそうです。)(5) 肯定的感情…かっぱおやじに対する肯定的な感情を話題としたもの (例:「かっぱおやじ探しが毎日楽しいとも言っていました」「『かっぱおやじ、面白いよー』と言っていた。)

(6) 否定的感情…かっぱおやじに対する否定的な感情を話題としたもの (例:「『おらんと思うけどわからん…、でもかっぱおやじのこと、怖いから話したくない…』と言ってます」「『かっぱおやじは怖いからお話しないで』と言っていました。)(7) その他…上記 6 つのカテゴリーのいずれにも該当しないもの (例:「浅草のかっぱ橋の話をしました」「『かっぱおやじ』という名前が出るだけで、具体的には教えてくれなかった。)

具体的な遊び・活動内容に関しては、10 名全ての親から何らかの記述が得られた。ここからは内容面で次の 4 つのカテゴリーが抽出された。(1) 絵本を読む…かっぱおやじまたはかっぱに関する絵本や図鑑を読んだというもの (例:「絵本を借りてきて、一緒に読んだ」「かっぱに興味を持って、一時期かっぱの本をたくさん読んでいた。)(2) 周辺を探索…園外保育でかっぱおやじが登場したとされる K 公園や身近な場所にかっぱおやじを探しに出かけたというもの (例:「川沿いを通った時や、茂みを見つけた時は、『かっぱおやじがいるかも!』と、辺りを探して『いないねえ』とガッカリ

しています。かっぱおやじは怖いけど、会ってみたい様子です」「K公園へ何度も行って、かっぱおやじ探しをしました」。(3) 関連する遊び…かっぱおやじに触発されて、それに関する遊びやその他の空想上の存在の遊びを楽しんだというもの(例:「園でのかっぱおやじとの出来事を話してくれた時は、親の方も興味津々で、かっぱおやじでこんなに話が膨らむんだと感心しました。家では、かっぱおやじではないけれど、全く別の架空の人物、または動物になりすまして、1人で物語をつくってなりきって楽しんでいました。アドリブというか即興劇のように次から次へ1人舞台しているかのように、セリフや話を展開しています。この時期にしかできないことだと思います」)。(4) その他…上記3つのカテゴリーのいずれにも該当しないもの(例:「トイレを怖がるようになり、穴に『ブルーレット置くだけ』でフタをしたら、解決しました」)。

これらのカテゴリーはいずれか1つに排他的に分類されるのではなく、記述によっては複数にまたがって分類された(以下の分類でも同様)。Table 1は、各カテゴリーに含まれる記述をした者の人数(%)を示したものである。会話に関しては、かっぱおやじの「出没する場所」「姿かたち」「性格・好み」など属性を話題としたものが最も多く見られたのに加えて、その想像・推理から生じた「疑問」もいくつか見られた。かっぱおやじがどのような存在なのかに関して子どもは好奇心旺盛で、その謎を探究しがっていることがうかがえた。また、「否定的感情」だけでなく「肯定的感情」も見られたことから、かっぱおやじは子どもにとって恐怖や不安のみを与える存在ではなく、喜びや楽しさを与える存在として捉えられていることがうかがえた。遊び・活動に関しては、記述数が少ないため目立った傾向は確認できなかったが、関連する絵本や遊びを楽しんだり、身近な場所を探索するなど、幼稚園に限らず家庭生活でもかっぱおやじに関する遊び・活動が展開していたことがうかがえた。

かっぱおやじに対する信念

幼稚園で生成・共有されたかっぱおやじの存在を子どもは信じているのであろうか。家庭内での子どもの様子をもとに、親に子どもがそれを信じていると考えられる程度について「すごく信じている」から「まったく信じていない」までの5段階で評価してもらった。

Table 2は各回答の人数(%)を示したものである。その結果、「すごく信じている」または「どちらかというと言っている」と回答した者は26名(72%)であり、「全く信じていない」と回答した者は皆無であった。このことから、大部分の子どもは親から見てその存在を信じている様子であったことが示された。以下では、

Table 2 かっぱおやじに対する信念

	人数 (%)
すごく信じている	12 (33)
どちらかというと言っている	14 (39)
どちらともいえない	4 (11)
どちらかというと言っていない	6 (17)
まったく信じていない	0 (0)

Table 3 かっぱおやじに対する信念の根拠

		人数 (%)
信念群 (N=26)	経験を語る	10 (38)
	関連付ける	6 (23)
	怖がる	5 (19)
	興奮して語る	4 (15)
	実在を主張する	3 (12)
	その他	3 (12)
	無回答	2 (8)
不信群 (N=10)	話題にしない	4 (40)
	非実在を主張する	2 (20)
	ふりをしている	1 (10)
	無回答	4 (40)

注. %は分析ごとの全体数を母数としている。

「すごく信じている」または「どちらかというと言っている」と回答した26名を「信念群」、「どちらとも言えない」または「どちらかというと言っていない」と回答した10名を「不信群」として分類し、それぞれに親が考えた子どもの信念の根拠について分析し考察する。

まず、信念群では、26名のうち24名から具体的な記述が得られ(無回答2名)、内容面で次の6つのカテゴリーが抽出された。(1) 経験を語る…かっぱおやじの存在を支持するような自らの経験談について語る子どもの姿に言及したもの(例:「降園時に、みんなで『本当にいる、出た』という話をしていたから』『かっぱおやじ、最近見た?』と聞いたところ、『見た!葉っぱの陰に隠れてた!』と言っていたので」「本当に見たような話をしていたので、いると思っている様子です」)。

(2) 関連付ける…子どもにとって不可解と思えるような結果と出会うと、それらをかっぱおやじの仕業として捉える子どもの姿に言及したもの(例:「よく消しゴムがなくなったりするので、かっぱおやじの仕業だと思っています」「寝る時、物音がすると、『かっぱおやじかな?』『怖いー!』と言って布団に隠れています」「当時は不思議な事が起こると、『かっぱおやじの仕業かも…』と言っていました」)。(3) 怖がる…かっぱおやじの存在を身近に感じて怖がった子どもの姿に言及したもの(例:「かっぱおやじを幼稚園で聞いたり、見たり(?)、感じたりすると、しばらく音に敏感になり、音がするたびに『かっぱおやじだー!』と私に怖がりながら飛

びついてきていました」「夜、寝る前に物音がして、『かっぱおやじかも』と本気で恐がった。)(4) 興奮して語る…かっぱおやじについて非常に興奮した様子で語る子どもの姿に言及したもの(例:「すごく興奮して園での様子をお話してくれます」「幼稚園や公園にかっぱおやじがいると教えてくれる時の目や声为本気だから」)。

(5) 実在を主張する…かっぱおやじが実在すると明確に主張する子どもの姿に言及したもの(例:「親が、『何それ? 本気にいるの?』と問いかけても、迷うことなく『おるよ』と答えた」「はっきりと答えるから」)。その他…上記 5 つのカテゴリーのいずれにも含まれないもの(例:「恐らく生物として捉えている様子でした」「なんとなく!」)。

次に、不信群では、10名のうち6名から具体的な記述が得られ(無回答4名)、内容面から次の3つのカテゴリーが抽出された。(1) 話題にしない…かっぱおやじについて自発的に話題にすることがない子どもの姿に言及したもの(例:「子どもの口から『もしかしたらかっぱおやじじゃない?』等ということは聞いたことがありません。あくまでも、子どもにとっては絵本の中の登場人物でしかないように思います」「その当時にそういう話が出ただけ報告はくれましたが、それ以降は全くその話が出ないです」)。(2) 非実在を主張する…かっぱおやじが実在しないと明確に主張する子どもの姿に言及したもの(例:「『かっぱおやじはどこにいるの?』という問いに対し、『お話の中の存在だからいない』とのことだったので」「『おらへんでー』と言われた。でも強がりだけで本当は信じているかも??」)。

(3) ふりをしている…周りの友達に合わせてかっぱおやじがいるふりをしているように見える子どもの姿に言及したもの(例:「みんなが話しているから、自分も話に乗っかっている様子」)。

Table 3 は、各カテゴリーに含まれる記述をした者の人数(%)を示したものである。信念群に関しては、子どもがかっぱおやじに関する経験を語ったり、無関連なもの同士を関連付けたり、そして、それを興奮した様子や怖がる様子で語ったりした場合に、信じていることの根拠とされた。語られる内容もさることながら、それがどのような感情状態を伴って語られるかによって、親は子どもの信念を推測しているようであった。不信群に関しては、子どもがかっぱおやじの話題について積極的に語ろうとするかどうか、あるいは仮に話題に参加していたとしても、その時の態度はどのようであったかによって、信念の状態が判断されていた。また、かっぱおやじの実在性を明確に主張する者や、逆に明確に否定する者もわずかではあるが確認された。ただ、仮に明確に否定した場合でも、「でも強がりだけで本当は信じているかも??」というように、子ども

の本当の信念を推し量ることは親と言えども困難なようであった。

他の空想上の存在に対する信念

子どもはかっぱおやじ以外の空想上の存在についてどのような信念を持っているのだろうか。また、親はそれについてどのような願いを持っているのだろうか。6つの馴染みのある空想上の存在(サンタクロース、節分の鬼、妖精、魔女、プリキュア、仮面ライダー)について、子どもが信じていると思うかどうか、親として信じていてほしいと願うかどうかを尋ねた。

Table 4 は、「子どもは信じていると思う」と回答した親と、「子どもには信じていてほしい」と回答した親の人数(%)を示したものである。その結果、サンタクロースについては全ての親が「信じている」と回答したのに対し、節分の鬼ではそのような回答は半数以下に過ぎず、残りの4つの空想上の存在については10~30%程度に過ぎなかった。また、「信じていてほしい」という願いについても同様に、サンタクロースではほとんどの親(83%)がそのように回答したのに対し、節分の鬼やその他の空想上の存在では5~30%程度に過ぎなかった。

また、1人当たりの信じている空想上の存在の数を算出したところ、6つ全てを信じている者は2名のみであり、5つが2名、4つが2名、3つが6名、2つが12名、1つが12名であった。信じている空想上の存在が全くない者はいなかった。親が信じていてほしいと願う空想上の存在の数に関しては、6つ全てが3名、5つが0名、4つが2名、3つが4名、2つが7名、1つが16名、0が5名であった。1つのみの場合、それは全てサンタクロースであり、2つの場合はサンタクロースと何かであった。空想上の存在を一括りとして全てを信じていたり、あるいは全てを信じていてほしいと願うことはまれであった。

Table 4 馴染みのある空想上の存在に対する
子どもの信念と親の願い

	子の信念	親の願い
行事関連		
サンタクロース	36 (100)	30 (83)
節分の鬼	16 (44)	11 (31)
伝説・童話関連		
妖精	11 (31)	9 (25)
魔女	8 (22)	6 (17)
メディア関連		
仮面ライダー	8 (22)	5 (14)
プリキュア	5 (14)	3 (8)

かっぱおやじに対する信念と関連する要因

かっぱおやじの存在を信じる程度は、幼稚園から家庭生活への広がりや、信じている空想上の存在の数、親が信じてほしいと願っている空想上の存在の数と何らかの関連が見られるのだろうか。関連について検討するにあたって、まず、かっぱおやじに対する信念に関しては、「まったく信じていない」に0点、「どちらかという信じていない」に1点、「どちらとも言えない」に2点、「どちらかという信じている」に3点、「すごく信じている」に4点を与えて、かっぱおやじ信念得点（0-4点）を算出した。次に、幼稚園から家庭生活への広がりやの程度に関しては、質問1と2の回答をもとに、家庭内でのかっぱおやじについての会話と遊び・活動ともに見られなかった場合に0点、幼稚園の枠内での会話が見られた場合に1点、幼稚園の枠外での会話が見られた場合に2点、幼稚園の枠外での会話に加えて、家庭での遊び・活動が見られた場合に3点を与えて、幼稚園-家庭広がり得点（0-3点）を算出した。さらに、信じている空想上の存在の数と親が信じてほしいと願っている空想上の存在の数に関しては、6つの空想上の存在のうち、「信じている」または「信じていてほしい」という回答があるごとに1点を加算し、空想上の存在得点（0-6点）を子どもの信念と親の願いに関して算出した。そのうえで、これら4つの得点間の相関分析を行った。

その結果、各得点の平均値と標準偏差は、かっぱおやじ信念得点が $M=2.92$, $SD=1.06$, 幼稚園-家庭広がり得点が $M=2.72$, $SD=1.02$, 空想上の存在（子どもの信念）得点が $M=2.33$, $SD=1.41$, 空想上の存在（親の願い）得点が $M=1.78$, $SD=1.58$ であり、このうち空想上の存在（子どもの信念）得点と空想上の存在（親の願い）得点の間でのみ中程度の有意な相関が確認された ($r=.591$, $p<.01$)。かっぱおやじ信念得点は他のどの得点とも関連が見られなかった。このことから、かっぱおやじの存在を信じることは、その存在を幼稚園から家庭へと広げて行ったり、他の馴染みのある空想上の存在を信じたり、親からそれを信じることを期待されたりすることと何ら関係がないことが示された。

考 察

本研究の目的は、幼稚園で生成・共有されたローカルな空想上の存在（かっぱおやじ）について、幼児はどのように認識していたのか、また、それは幼稚園から家庭生活へとどのような広がりを示したのかを探ることであった。かっぱおやじをめぐる想像的探険遊びに参加した年長児（5-6歳児）36名の保護者を対象に、家庭でのかっぱおやじについての会話や遊び・活動、か

っぱおやじに対する信念、他の空想上の存在に対する信念との関連を尋ねる質問紙調査を行った。

まず、かっぱおやじの存在の幼稚園から家庭への広がりに関しては、幼児の多くはかっぱおやじの出没する場所や姿かたち、正確や好みなど、その神秘的で驚異的な属性に関心を持ち、疑問を生じさせ、家庭でもそうした関心や疑問を持続させ、関連する絵本や遊びを楽しんだり、身近な場所でそれを探し求めたりするなど、その存在のリアリティは幼稚園の枠を超えて家庭生活にも広がっていたことが示された。これまでの想像的探険遊びの実践報告では、園生活の中で生成・共有されたローカルな空想上の存在が家庭の中でどのように受け止められ、会話や遊び・活動の中にどのように登場したかに関しては、保育者と保護者との間の偶発的なやりとりで見られた逸話的な内容としていくつか報告されてきたに過ぎなかった。つまり、一連の特定された質問による組織的な調査の結果にもとづく報告は皆無であった。その意味においては、本研究は初の試みであり、空想上の存在が登場する想像的探険遊びが単に園内だけでなく、家庭内においても親子間の会話や遊び・活動を広げ充実させる機能を持つことを示したという点で意義があると言える。

しかし、こうした園から家庭への拡充は、何も空想上の存在が主題であったからこそ見られた、というわけではないのかもしれない。例えば、幼稚園・保育園では、小さな生き物を飼育したり、農作物を栽培して調理したり、あるいは虹や氷、光と影など自然現象の謎に挑んだり、色水やシャボン玉、泥団子をつくったりするなど、空想上の存在とは異なる性質の謎めいた対象、いわば、科学的な存在やプロセスとの出会いを数多く経験する（富田, 2015）。恐らく、これらの実践でも同様に、幼稚園・保育園に留まらず、家庭生活にも広がりを示すであろう。問題なのは、空想的な主題と科学的な主題との間で、子ども同士や親子の会話や遊び・活動にどのような共通点と相違点が見られるのかという点である。この点については、今後検討を進める必要があるだろう。

次に、かっぱおやじに対する認識に関しては、幼児の多くはかっぱおやじの存在を信じており、その根拠として、経験したことを興奮した様子で語ったり、日常の何気ない無関連なものをかっぱおやじと関連付けて怖がったりしていたことが示された。これまでの想像的探険遊びの実践報告では、先述と同様に、子どもの信念は逸話的な報告に限られており、組織的な調査は行われてこなかった。その点では、親による報告ではあるものの、72%の子どもがかっぱおやじの存在を信じていたという本研究の結果は、従来の研究に新たな知見を追加するものであると言える。

子どもたちによる生成・共有というプロセスは経ていないものの、Woolley, Boerger, & Markman (2004) と Boerger, Tullos, & Woolley (2009) は、子どもたちに新奇の空想上の存在(キャンディ・ウィッチ, Candy Witch) についての情報を提供し、それにまつわる慣習にも参加させた場合、子どもはその新奇の空想上の存在をどの程度信じるかを調べている。キャンディ・ウィッチは飴玉の好きな魔女であり、ハロウィンの夜にもらった飴玉を枕元に置いておくと、夜中に新しい玩具と取り換えてくれる存在として子どもに説明された。

Woolley ら (2004) の研究では、3-5 歳児 44 名を対象に実施したところ、66% の子どもがキャンディ・ウィッチの存在を信じ、実際に訪問を受けた(朝起きると飴玉の代わりに新しい玩具が残されていた) 子どもほど、年少(3-4 歳) よりも年長(4-5 歳) の子どもほど、そして、もともと空想傾向が高かった子どもほど、その存在を信じる傾向が強かったことを明らかにしている。また、Boerger ら (2009) の研究では、対象年齢の幅を広げて 3-7 歳児 77 名を対象に、ハロウィン前にキャンディ・ウィッチの情報を初めて提供してから 1 年後まで、4 つの時点でその実在性を尋ね、1 年間の信念の軌跡とその変動に影響を及ぼす要因を探った。その結果、1 年間ずっと「本当にいる」と主張し続けた「安定した信念群」の子どもは 53%、「本当にいる」と「本当はいない」との間で揺れ動いた「揺れ動く信念群」の子どもは 42%、1 年間ずっと「本当はいない」と主張し続けた「安定した不信群」の子どもは 5% であることを明らかにした。また、最初に信じた時点で年齢が高かった(6-7 歳) 子どもは、1 年の間に信じない方向へと揺れ動くことが多かったことを明らかにしている。

Woolley と Boerger らの研究は、大規模で組織的な研究であり、子どもたち自身が作り出したのではなく、大人によって与えられたものではあったものの、ローカルな空想上の存在についての情報を提供され、その存在を支持するような経験的根拠を与えられた子どもは、その多くが与えられた空想上の存在を容易に信じてしまうことを明らかにしたという点で意義があると言える。そして、こうした結果は本研究でも同様であった。今後の研究では、Woolley と Boerger らの研究と同様に、信念が形成された後の軌跡やその変動に影響を及ぼす要因を探ることが重要である。しかし、空想上の存在を信じることは子ども(または家族にとって)にとって個人的で特別な事柄であるため、その方法については慎重に検討する必要がある。

さらに、他の空想上の存在に対する信念との関連に関しては、提示した 6 つの馴染みのある空想上の存在のうち、子どもに強く信じられ、また親としても信じてほしいと強く願っている存在はサンタクロース

のみであり、その他の存在に関しては、支持率は 10~30% 程度と低かった。こうした結果は、行事関連の空想上の存在は幼児の大部分において信じられているのに対して、伝説・童話関連や現代メディア関連の空想上の存在は 10~40% 程度に過ぎなかったという先行研究(e.g., Sharon & Woolley, 2004; Woolley et al., 2004) の結果とも一致する。興味深いのは、同じ行事関連の空想上の存在でも、節分の鬼の実在性に対する子どもの信念や親の願いは、サンタクロースのそれと比べて極めて低かったという点である。この結果は、それぞれが喚起させる感情の違いが関係していると考えられる。サンタクロースが喜び・幸福感情と強く結びついているのに対して、節分の鬼は恐怖・不安感情と強く結びついている。幼児期の子どもは、それが現実的であろうと空想的であろうと、恐怖や不安を喚起させる存在や出来事は、現実起こってほしくないし、起こらないものだと思いたがる傾向にあることが先行研究(e.g., Carrick & Quas, 2006; Samuels & Taylor, 1994) で示されている。そして、それは安全を求める彼らの防衛機制が働くためであると考えられている。こうした先行研究の結果と照らし合わせると、サンタクロースと比べて節分の鬼に対する実在性の信念が極めて低かったという本研究の結果も、不思議ではないであろう。

重要なのは、かっぱおやじの存在を信じることとその他の馴染みのある空想上の存在を信じることとの間に正の相関が見られるかどうかであった。分析の結果、子どもの信念と親の願いとの間に有意な正の相関が見られた以外には、関連は確認されなかった。Woolley ら (2004) の研究においても、キャンディ・ウィッチを信じることは、彼らの空想傾向(空想の友達を持っていたり、なりきり遊びを頻繁にしたりなど)とは関連が見られたものの、信じている他の空想上の存在の数との間には関連が見られていない。直観的には、ある特定の空想上の存在を信じることと他の空想上の存在を信じることとの間には、何らかの密接なつながりがありそうに思えるが、いくつかの先行研究が示すところによると、両者の間には関連が見られていない。このことは、私たち大人が、神秘的で驚異的であるという理由で「現実にはいない」「空想的なもの」として一括りに判断するいくつかの存在は、子どもにとっては必ずしもそのように一括りにされる存在ではなく、それぞれの経験に従って彼らの存在論的な見取り図の中に個別に配置される存在として受け止められていることを意味しているのかもしれない。実際、Morison & Gardner (1978) の研究では、「現実にはいない」「空想的なもの」というカテゴリーの自発的な使用は、児童期以降にならないと生じないことが示されている。

また、かっぱおやじを信じることは、その存在を幼

稚園から家庭へと拡げて、会話の中で話題にしたり、新たな遊び・活動へとつなげたりすることと関係がなかった。この点に関しても、直観的には、両者の間に密接なつながりがありそうに思える。なぜなら、日々の保育において、ヒーローやヒロインの話題を頻繁に口にし、その遊びに夢中になるのは、大抵の場合、その存在を強く信じている子どもたちだからである。しかし、本研究では、かっぱおやじの存在について半信半疑であるような子どもにおいても、家庭での会話の中でそれについて話題にし、遊びや活動へとつなげている姿が、保護者による記述からしばしば確認された。このことは、かっぱおやじのようにローカルな集団の中で生成され共有された神秘的で驚異的な存在は、その存在を信じようと信じまいと、家庭の中で話題にされ、新たな遊び・活動へと展開する土台を提供し得るものであることを示唆しているとも言えよう。

最後に、本研究の意義と今後の課題について述べる。本研究では、これまで検討されてこなかった、幼稚園・保育園での想像的探検遊びで見られる、子どもたちによって生成・共有されたローカルな空想上の存在に対して、子どもはどのような信念を形成しているか、また、その存在のリアリティは幼稚園・保育園の枠を超えて家庭生活へとどのように拡がっているかについて、初めて実証的に検討したという点で、意義があると言える。ローカルな空想上の存在に対する子どもの信念や、その存在の家庭内での拡がりを探る方法については、保護者に対する質問紙調査以外にも、子ども自身に個別面接で直接インタビューする方法も考えられる。しかし、幼稚園での遊びの中で、今まさに集団的に信じられている様子の空想上の存在について、その実在性が確かであるかどうかを子どもに直接聞くという方法は、保育者の実践のねらいや計画、その後の実践の展開、そして、子どもの想像世界に及ぼす影響等を考えた上でも、倫理的に選択できない方法であった。

本研究のもう一方のプロジェクトである富田ら(2021)の研究では、子どもが自由な遊びをしている最中に子どもに話しかけ、そこでさりげなくかっぱおやじについて尋ねることで、その信念を探ろうとした。しかし実際には、それは困難な作業であった。彼らの多くは自分が経験したことや、経験した気になっていることについて語り、信念について語ることはほとんどなかった。ゆえに、本研究では保護者を対象とした質問紙調査に頼らざるを得なかったが、あくまでも保護者による回答であるため、どれほど子どもの真実に近づくことができたかという点では疑問が残された。今後の研究では、空想上の存在を信じつつ展開していく想像的探検遊びの渦中であって、子どもたちがその存在のリアリティをどのように感じ、どのような空想

世界を想像しているかについて探る、より相応しい方法を検討していく必要がある。

文 献

- Boerger, E. A., Tullos, A., & Woolley, J. D. (2009). Return of the Candy Witch: Individual differences in acceptance and stability of belief in a novel fantastical being. *British Journal of Developmental Psychology*, **27**, 953-970.
- 安曇幸子・吉田裕子・伊野緑.(2003). *でた！かっぱおやじ*. 東京：サンパティック・カフェ.
- Carrick, N., & Quas, J. A. (2006). Effects of discrete emotions on young children's ability to discern fantasy and reality. *Developmental Psychology*, **42**, 1278-1288.
- Clark, C. D. (1995). *Flights of Fancy, Leaps of Faith: Children's Myths in Contemporary America*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Corriveau, K. H., Kim, A. L., Schwalen, C. E., & Harris, P. L. 2009 Abraham Lincoln and Harry Potter: Children's differentiation between historical and fantasy characters. *Cognition*, **113**, 213-225.
- 藤野友紀.(2008). 遊びの心理学：幼児期の保育課題. 石黒広昭(編). *保育心理学の基底*(pp.116-148). 東京：萌文書林.
- Goldstein, T. R. & Woolley, J. D. (2016). Ho! Ho! Who? Parent promotion of belief and live encounters with Santa Claus. *Cognitive Development*, **39**, 113-127.
- Harris, P. L. (2000a). *The work of the imagination*. Malden, MA: Blackwell.
- 岩附啓子・河崎道夫.(1987). *エルマーになった子どもたち*. 東京：ひとなる書房.
- 河崎道夫.(1993). 子どもの遊び世界の探究. *発達*, **55**, 16-23.
- 河崎道夫.(1994). *あそびのひみつ*. 東京：ひとなる書房.
- 河崎道夫.(1997). *発達を見る目を豊かに*. 東京：ひとなる書房.
- 加用文男.(1990). *子ども心と秋の空*. 東京：ひとなる書房.
- 加用文男.(1993). 遊び研究の方法論としての「心理状態主義」. *発達*, **55**, 1-15.
- 加用文男.(1994). *忍者にであった子どもたち*. 京都：ミネルヴァ書房.
- Li, H., Boguszewski, K., & Lillard, A. S. (2015). Can that really happen? Children's knowledge about the reality status of fantastical events in television. *Journal of Experimental Child Psychology*, **139**, 99-114.
- Morison, P., & Gardner, H. (1978). Dragons and dinosaurs: The child's capacity to differentiate fantasy from reality.

- Child Development*, **49**, 642-648.
- Rosengren, K. S., Johnson, C. N., & Harris, P. L. (2000). *Imagining the impossible: Magical, scientific, and religious thinking in children*. New York: Cambridge University Press.
- Samuels, A., & Taylor, M. (1994). Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417-427.
- Sharon, T., & Woolley, J. D. 2004 Do monsters dream? Young children's understanding of the fantasy/reality distinction. *British Journal of Developmental Psychology*, **22**, 293-310.
- Shtulman, A., & Yoo, R. I. (2015). Children's understanding of physical possibility constrains their belief in Santa Claus. *Cognitive Development*, **34**, 51-62.
- Skolnick, D., & Bloom, P. (2006). What does Batman think about SpongeBob? Children's understanding of the fantasy/fantasy distinction. *Cognition*, **101**(1), b9-b18.
- Subbotsky, E. (2010). *Magic and the mind: Mechanisms, Functions, and development of the magical thinking and behavior*. New York: Oxford University Press.
- 富田昌平. (2015). 幼児期にふさわしい保育・教育とは何か：科学分科会での実践報告と討論を通して. *保育問題研究*, **274**, 28-40.
- 富田昌平. (2018). 保育における想像的探険遊びの展開：エルマー実践から 30 年の節目を超えて. *心理科学*, **39**, 74-89.
- 富田昌平・久世彩加・河内純子. (2021). 幼児はかっぱおやじとどのように出会うのか？：幼稚園におけるローカルな空想上の存在の生成と共有. *三重大大学教育学部研究紀要 (教育科学)*, **72**, 印刷中.
- Woolley, J. D. (1997). Thinking about fantasy: Are children fundamentally different thinkers and believers from adults? *Child Development*, **68**, 991-1011.
- Woolley, J. D., Boerger, E. A., & Markman, A. B., (2004). A visit from the Candy Witch: Factors influencing young children's belief in a novel fantastical being. *Developmental Science*, **7**, 456-468.

付 記

本論文は、第二著者による三重大大学教育学部 2017 年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。本論文の執筆にあたり、平成 29 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号：17K04351）の助成を受けた。調査にご協力いただいた幼稚園の先生方、クラス担任の K 先生、幼児及び保護者の皆様に深く感謝申し上げます。